



国立研究開発法人  
国際農林水産業研究センター  
Japan International Research Center for Agricultural Sciences

2026年度  
職員募集  
案内

現場と世界をつなぐ科学を、  
あなたのキャリアに



国立研究開発法人  
国際農林水産業研究センター

本所 (つくば市)

住所 〒305-8686 茨城県つくば市大わし1-1  
Tel. 029-838-6313  
Fax. 029-838-6316

熱帯・島嶼研究拠点 (石垣市)

住所 〒907-0002 沖縄県石垣市字真栄里川良原1091-1  
Tel. 0980-82-2306  
Fax. 0980-82-0614



採用に関する問い合わせ先  
<https://www.jircas.go.jp/ja/form/recruitment>



# 国際農研の目指す未来

科学で支える、世界の食と環境

## MESSAGE

世界の農林水産業と食を取り巻く情勢が大きな転換期を迎えている今、国際農林水産業研究センター（国際農研または JIRCAS）では、科学の力で地球と食料の未来をつくる仲間を募集しています。国や分野の壁を越えて、多様な知や技と情熱を結集し、現場に根ざした研究で持続可能な農林水産業と食料システムの実現に挑みませんか。



地球規模の食料や環境の課題が複雑さを増している現在、私たち人類が進むべき道を照らすのは「現場に根ざした科学」です。気候変動、資源の制約、貧困や栄養問題—そのどれもが国や地域を越えて密接に関わり合っていますが、その中で核となる課題を見極め、解決に向けた科学的なエビデンスを示すことが求められています。

だからこそ、私たち国際農研は、日本を代表する国際的な農林水産業の研究機関として、アジア、アフリカ、中南米など世界各地の研究機関や農村の人々と協働し、地球規模の課題解決を科学の力で支える努力を続けています。それが、私たちが日本国内と世界各地の現場を結んで実施している、持続可能な農林水産業と食料システム実現のための研究開発です。

## 基本理念

私たちは、最新の科学的知見を駆使し、食料不安や栄養不良、気候変動に伴う資源管理など、地球規模の課題に取り組みます。日本を代表する国際農林水産業分野の中核研究機関として、国際的な科学的議論を主導し、日本の食料安全保障と世界の安定・繁栄に寄与します。

研究分野は、作物改良、水資源管理、土壌・環境保全、食品科学、経済・社会分析など多岐にわたり、自然科学から社会科学まで幅広い専門家が集まっています。私たちは研究成果を論文に留めず、現場での実践を通じて社会に還元することを目指しています。そのためには、研究と運営を支える多様な力が結集し、ひとつの目標に向かって進む姿勢が欠かせません。

職場には、海外のフィールドで未来を見据える研究者、実験データの蓄積を支える技術職員、そして国際共同研究や組織運営を円滑に導く事務職員がいます。それぞれの専門と役割は異なっても、共通しているのは「科学を通じて世界の農と食に貢献したい」という強い使命感です。研究の現場を支える一般職の存在があるからこそ、研究者は安心して挑戦を続け、国際的な連携も着実に進めることができます。そこでは、科学的探究心と多様な文化への理解、そして挑戦を恐れない意志が何よりも大切です。まさに、すべての職員が「チーム JIRCAS」として世界に向き合っています。

国際農研では、多様なバックグラウンドをもつ人々が互いに刺激を与え合い、新たな発想を生み出しています。国籍も文化も異なる仲間との協働の中で、科学的探究心だけでなく、柔軟な対応力や共感性も磨かれていきます。失敗を恐れずに挑戦できる環境が、ここにはあります。

地球の農と食が直面する課題は、決して容易ではありません。しかし、一步一步の積み重ねが、次の世代の希望を育みます。未知の領域に踏み出す勇気と、科学への探究心を持つあなたへ—。ここ国際農研で、世界とともに未来を切り拓いていきませんか。

## 役割と理念

### MISSION

国際農研は、熱帯・亜熱帯地域や開発途上地域を中心に、農林水産業の研究協力と技術開発を行う国立研究開発法人です。農林水産省の所管のもと、地球規模の食料・環境問題の解決と、持続可能な食料システムの実現に貢献しています。

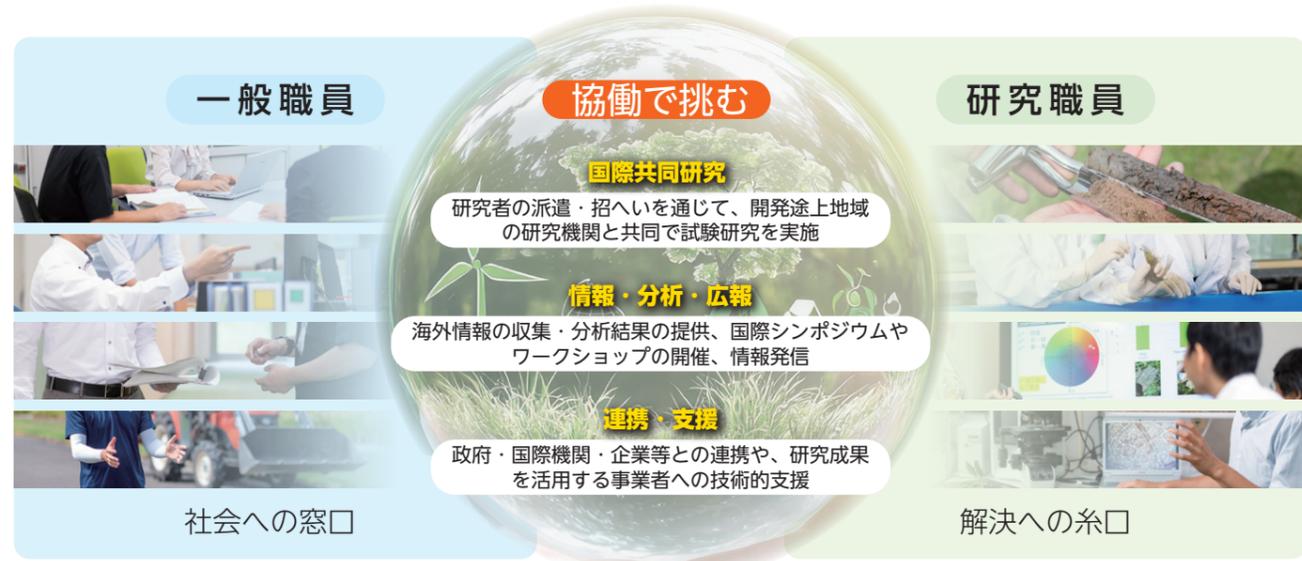
## 業務内容

熱帯・亜熱帯および開発途上地域での試験研究を通じて、農林水産業に関する技術向上を図り、関連データの収集・整理・分析を行っています。また、研究成果の実用化に向けて、事業者への出資や人的・技術的支援も実施しています。これらの活動を通じて、世界の食料問題や環境問題の解決、そして農林水産物の安定供給に貢献しています。

# 主な活動

WORK

「研究開発成果の最大化」を目指し、研究の成果が実際に現場で活かされることを常に意識して調査・研究を進めています。また、国内外の研究機関、行政、国際開発機関、農林漁業者、企業との協働と連携を通じて、農林水産分野のイノベーションを推進しています。さらに、すべての職員が安全に、そして働きがいを持って力を発揮できる職場環境づくりにも取り組み、組織の活力と創造性を高めています。



# 求める人材

TALENT

## 求める人材像

- 国際共同研究を通じて、開発途上地域の農林水産業や地球規模課題の解決に貢献したい人
- 異分野・異文化の専門家と協働し、調整力と創造力を発揮できる人
- 現場での調査や海外出張にも意欲的に取り組める人

## 仕事のフィールド・キャリア

- 研究職：国際共同研究プロジェクトの企画・実施、成果発信など
- 一般職：庶務・財務・広報・研究支援業務などを通じた研究活動の基盤づくり
- 海外機関との共同研究や国際会議への参加など、長期的なキャリア形成の機会あり

## 職場環境・働き方

- 裁量労働制、フレックスタイム制、在宅勤務制度など、ワークライフバランスに配慮した働き方
- 語学研修など、国際的に活躍するためのスキル向上を支援
- ハラスメント防止やメンタルヘルス相談窓口など、安心して働ける体制

研究職／一般職の具体的な仕事紹介はこちら…▶

# 現場で輝く研究者たち

研究の最前線で挑む、JIRCAS 研究者の声

VOICE - Research staff

国際農研の研究職は、世界のフィールドで課題と向き合いながら、専門性を生かして解決策を生み出す仕事です。ここでは、さまざまな分野で活躍する7名の研究者に「研究内容とやりがい」「必要なスキル」「国際農研で働く魅力」を聞きました。ここで描けるキャリアを、イメージしてみてください。



私の専門は「植物病理学」です。植物にも病気があり、病原体が引き起こす被害は人々の生活に大きな影響を与えています。私は主に南米地域で発生する植物病原菌の発生病態を研究し、病気の原因を明らかにして適切な防除につなげることを目指しています。南米は世界の農業を支える重要な地域であり、現地の研究機関と連携しながら農作物の安定生産への貢献を目指しています。

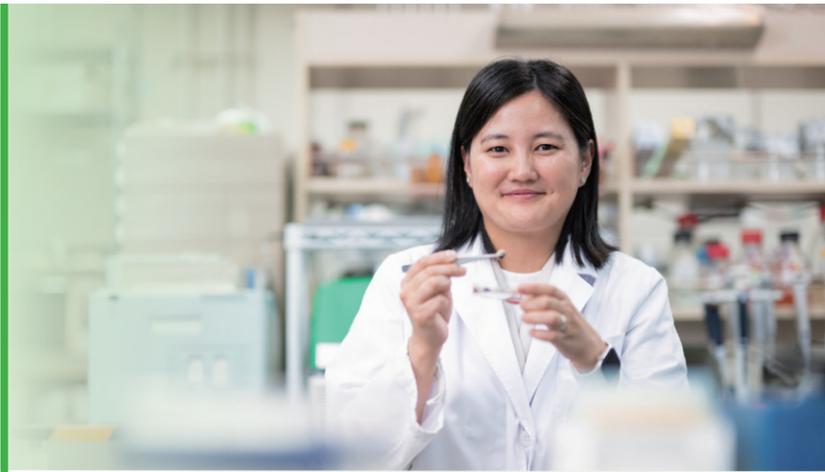
植物病理学の魅力はフィールドにあります。植物病原菌は環境にあわせて常に変化しており、その最前線は現場にあります。現地の農場やジャングルで病気の植物を探し、採取したサンプルを分析して新たな現象に出会うことは、この分野の大きなやりがいです。

この研究には観察力と体力、そして柔軟な発想が欠かせません。どんなに過酷な環境でも自然を相手に冷静に現象を見つめ、新しい発見を楽しむ好奇心が重要です。また、海外の研究者と共同研究を進めるうえでは、積極的に関わり、相手の考えを汲み取るコミュニケーション力も求められます。

国際農研で働く魅力は、国際的なネットワークと自らの裁量の大きさにあります。少人数のチームで研究を進めるため、自身のアイデアを軸に課題を企画し、実行できます。若手の段階から「国際農研代表」として世界の研究現場で活動できる経験は、研究者として成長するうえで非常に貴重だと感じています。

## 柏毅 Takeshi Kashiwa

生物資源・利用領域 主任研究員  
Senior Researcher  
Biological Resources and Post-harvest Division  
専門分野：植物病理学



## 中川 アンドレッサ

Andressa Nakagawa  
生産環境・畜産領域 研究員  
Researcher  
Crop, Livestock and Environment Division  
専門分野：作物学

私はアフリカでのダイズ栽培における低い土壌肥沃度や環境ストレスの課題解決に取り組んでいます。人口が急増するアフリカでは飢餓や食料不足が深刻であり、食料生産の増加と栄養改善は大きな課題です。私は研究を通じて、小規模農家が活用できる新しい栽培技術や品種を開発・紹介し、将来的には農家自身が持続的に栽培できる環境を整えることで、収入向上や栄養改善にも貢献したいと考えています。

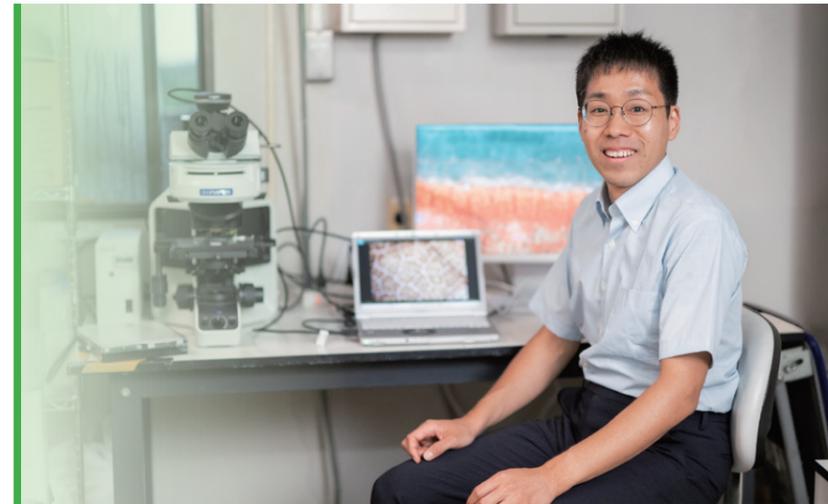


研究を行う、あるいは研究者であるために重要なことの一つは、好奇心と粘り強さだと思います。

知的好奇心は、新しいことや特定の分野で必要とされることを研究するうえで重要です。また、研究には未知の課題に取り組むことが伴うため、粘り強さも必要だと思います。

国際農研での勤務を通じて、農業の発展が求められるアフリカ諸国で研究を行い、他分野の研究者との交流を通じて知識を広げる機会を得ました。

一方で、仕事とプライベートの両立は決して簡単ではなく、とくに子どもがいるとそのバランスを取ることは難しく感じます。それでも、国際農研で研究者として働くことで、研究と家庭の両方に向き合えるよう必要なサポートを受けられており、大変恵まれた環境だと感じています。



## 河合 清定 Kiyosada Kawai

林業領域 研究員  
Researcher  
Forestry Division  
専門分野：森林生態学

「植林は王者の業である」。これは思想家・内村鑑三の言葉です。彼は19世紀後半、植林を通じて生産環境を改善し、国の復興を成し遂げたデンマークを称え、森林の持つポテンシャルをこう評しました。実際に森林は、木材生産のみならず、気候変動の緩和や災害リスクの低減など、多面的な機能を長期にわたり発揮する可能性を有しており、その意義は近年ますます高まっています。そこで問われ

ているのは、どのようなビジョンでその可能性を活かすかです。私は、世界有数の木材生産地である東南アジアの熱帯林において、気候変動下での安定的な木材生産を目指し、樹木生理学的手法を用いた環境適応性の評価や、優れた成長や材質特性を備えた木材を生み出す育種研究に取り組んでいます。地域社会と地球環境の未来に向けて、木と森が持つ可能性を一つ一つ明らかにしていくことに、大きなやりがいを感じています。

東南アジアの方々から林業に寄せる期待は大きく、共同研究を進める中で、研究能力に加えて様々な資質やスキルの重要性を痛感しています。例えば、研究成果を的確に伝える言語化の力、課題を複合的かつ長期的に捉える視野、そして周囲を巻き込みながら前に進めていく情熱が求められます。

熱帯の森には、まだ解明されていないことが数多く残されています。そのため、研究成果が社会に大きなインパクトを与える可能性を秘めています。国際農研は、このフロンティアにおいて将来を見据え、木と森の研究にじっくりと取り組むことができる最適な場所だと感じています。



## 八下田 佳恵 Yoshie Yageta

社会科学領域 研究員  
Researcher  
Social Sciences Division  
専門分野：農業普及・土壌肥料

アフリカの農業生産性向上に農家の知識を活用するため、ガーナとマダガスカルを対象に、農家知識や農家による農業技術評価を研究しています。農家への聞き取り調査を通じて現地の英知に触れることはとても楽しく、また、技術評価に関する研究成果は、現地での開発技術の定着性向上に直結するので、大きなやりがいを感じています。

スキルよりも「姿勢」が重要だと感じています。国際農研ではプロジェクト単位で研究活動を進めるため、多分野連携が欠かせません。自分の専門にとどまらず、幅広い分野の



研究者と交流する姿勢が求められます。海外経験は必須ではなく、むしろ海外や食料・環境問題への関心や熱意こそが研究活動を支える原動力になると思います。

海外を対象として農業研究に取り組めることは私にとって大きな魅力です。さらに国際農研には、開発した技術を社会実装につなげるという方針があるので、より実践的な研究環境が整っています。労働条件においても、裁量労働制などが整備されており、性別やライフスタイルに左右されず、公私のバランスを保ちながら研究を続けられる点も魅力です。



## 岩崎 真也 Shinya Iwasaki

農村開発領域 研究員  
Researcher  
Rural Development Division  
専門分野：土壌学

私はアフリカやアジアの農業現場を舞台に、土壌炭素貯留を通じた持続可能な農業と気候変動対策の研究に取り組んでいます。土壌は食料生産を支える基盤であると同時に、陸域で最大の炭素貯蔵庫でもあり、その変動は地球規模の炭素循環に大きな影響を与えます。農地では、適切な土壌管理によって作物生産性の向上と温室効果ガスの吸収を同時に実現



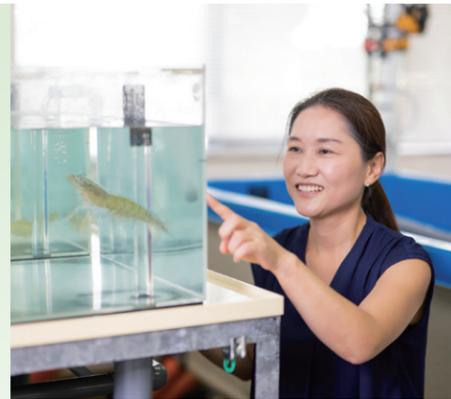
できる点に、この研究分野ならではのやりがいがあります。

研究には、土壌や作物に関する専門知識に加え、現場を自ら観察し仮説を立てる力、そして多様な国や分野の研究者や農家の方々と協働するためのコミュニケーション力が求められます。土壌は単純化しても12種類に分類され、それぞれ異なる性質を持ちます。さらに国や地域、農業慣行の違いによって課題も多様であり、現場ごとに最適解を考える姿勢が重要です。国際農研には、世界各地の研究機関と連携し、基礎研究から社会実装までを一貫して扱える研究基盤があり、若手研究者が国際的な視野を持って成長できるフィールドだと感じています。



**姜 奉廷** Bong Jung Kang  
水産領域 主任研究員  
Senior Researcher  
Fisheries Division  
専門分野：生理学（水産増養殖）

私は、水産領域で甲殻類の内分秘メカニズムを研究し、その知見を養殖産業に応用する技術開発に取り組んでいます。これまで、世界のエビ養殖の約8割を占めるバナメイエビを対象に、卵成熟を促す因子の動態解析や、非侵襲的な成熟促進技術の開発に挑戦してきました。基礎研究で生まれた新たな知見が、養殖の現場で実際に役立つ技術として社会に還元されることに大きなやりがいを感じます。研究には、水生動物の生理や飼育管理など



の基礎知識に加え、命を預かる研究者としての責任感が欠かせません。日々の観察や地道な実験の積み重ねを通じて、動物の小さな変化を正確に捉える力が求められます。また、成果を社会へ届けるためには、研究者だけでなく企業や一般の方々にもわかりやすく伝えるコミュニケーション力が重要です。

国際農研では、多様な分野の研究者と日常的に意見交換できる環境があり、異分野からの視点が新しい発想を生み出すきっかけになっています。事務や管理部門の方々のサポートも温かく、研究者一人ひとりが安心して挑戦と成長を続けられる環境です。



**寶川 拓生** Hiroo Takaragawa  
熱帯・島嶼研究拠点 研究員  
Researcher  
Tropical Agriculture Research Front  
専門分野：栽培生理（さとうきび）

私は、熱帯・島嶼研究拠点（石垣島）で、多様な遺伝資源を活用しながらサトウキビの生産性改良に関する研究に取り組んでいます。国内外から収集された近縁野生種や多様な品種を交配して雑種集団を作出し、その形質の変異に着目して、生理生態学・遺伝育種学的なアプローチにより、生産性に関する形質や、それをもたらす遺伝子の解明を進め



ています。こうした研究を通じて、高い生産性や環境負荷の低減など、将来のサトウキビ産業を支える有望な形質を備えた品種の育成を目指しています。

研究者には様々な専門スキルが求められますが、その中でも「根気強さ」は特に重要だと感じています。高温・強日射の環境での野外作業に耐える体力、思うように研究が進まない時にも前向きに粘り強く取り組む忍耐力、自身の研究や研究者像の将来ビジョンを描く想像力、新たな専門スキルの習得に挑戦する行動力や周囲と協働するコミュニケーション力が欠かせません。多様な専門家が集う環境で異分野連携を深めながら、新たに加わる皆さんと共に視野を広げ、成長し続けることを楽しみにしています。

## 見えないところで光る チーム力 研究を支える、JIRCASの“縁の下の力持ち”

VOICE - General staff

国際農研の一般職は、研究者が世界各地で力を発揮できるよう、組織とプロジェクトの運営を支えています。庶務・財務・契約・海外業務の総合調整など、活躍のフィールドは多岐にわたります。このページでは、5名の職員に「仕事の内容」「日々のやりがい」「業務に必要なスキル」「国際農研で働く魅力」を紹介してもらいました。研究を支えるキャリアの姿をぜひ知ってください。



**中野 夢** Yume Nakano

総務部 庶務課 労務・人事班  
General Affairs Section, Personnel Subsection

私は人事第1係で、新規職員の採用や賃金計算、人事関連業務を担当しています。

採用業務では、応募者との連絡調整や資料作成、試験運営などを通じて、選考が円滑に

進むようサポートしています。賃金計算では、勤怠や社会保険情報をもとに毎月の給与を算出し、細かな確認を重ねながら正確な処理を心がけています。

やりがいを感じるのは、自分が採用業務に携わった人材が職員として仲間になる瞬間です。また、賃金計算を通じて税制度や社会保険等への理解が深まり、日常生活にも役立つ知識が得られることもこの仕事の魅力です。

人事第1係の業務は、他部署や外部の関係者との連携が欠かせません。そのため、一人で完結する仕事ではなく、周囲との円滑なコミュニケーションが重要になります。また、業務の中で直面する課題や不明点に対して、まずは自分で調べ理解しようとする姿勢も大切です。

国際農研は緑豊かな場所にあり、明るく前向きな人が多く、毎日楽しく働くことができます。外国籍の職員をはじめ、日々さまざまなバックグラウンドを持つ人と関わる機会がありますので、多様な視点に触れることで、新しい気づきや学びが得られるのも、この職場ならではの魅力です。



**海老原 卓郎** Takuro Ebihara

総務部 財務課 用度班 調達係  
Accounting Section, Procurement Subsection

財務課調達係では、所内で必要な物品やサービスの調達を幅広く担当しています。パソコンや事務機器などイメージしやすいものから、自動車の購入・売却、システムの導入や改修、イベントの会場手配など多岐にわたる業務に携わっています。国際農研は公金で運営されているため、見積競争や入札を通じて、できるだけ有利な条件で調達することが求められています。

契約実績の公表や、物品購入の記録をまと

めて国に報告する作業も大切な役割です。

大きな案件は契約まで数ヶ月かかることもあります。そうした案件が無事に終わって形になったときは達成感があります。また、急ぎの依頼に迅速に対応して、感謝の言葉をいただくと「やって良かった」と思います。商品の流通や価格は日々変化し、最近ではネットでの購入や電子決済も一般的になりました。決められたルールの中でどう対応していくか試行錯誤するのも楽しいです。うまく

いったときの達成感は格別です。

調達係は業者の方と接する機会が多いですし、内部の職員とも折衝しながら案件を進めますので、コミュニケーション力は欠かせません。依頼内容によっては急ぎのものや長期案件、予想外のトラブルもあり、優先順位をつけてスケジュール管理しながら柔軟に動く姿勢が求められます。ただし、基本的な業務は規定に沿って進められるため、特別な資格やスキルは必要なく、安心して取り組みます。

国際農研は「世界の安定した食料供給に貢献する」という大きな目標を掲げていて、世界各国の研究機関や大学と連携しています。その一端を一般職員の立場からも実感でき、活動のスケールの大きさを誇りに思えます。

福利厚生や安定した雇用体制が整っていて、ワークライフバランスを実現しやすい環境です。さらに、異動を通じてさまざまな仕事を経験でき、職員それぞれにあったキャリア形成が考えられている点も、長く働き続けられる魅力の一つです。



**加藤 雄人** Takehito Kato  
総務部 庶務課 厚生係  
General Affairs Section, Welfare Subsection

私は総務部庶務課の厚生係という部署において、主に職員の福利厚生や、安全衛生管理に関係する業務を担当しています。業務内容は社会保険や健康診断など多岐にわたりますが、いずれも職員の生活に密着し、一人ひとりに寄り添うことができる、大変な

らもやりごたえのある仕事です。厚生係の業務においては、センターの内部規程のほか、様々な法令や制度に基づく各種手続きを行っています。これらについて学んでゆくなかで、自分の成長を実感することができ、日々のモチベーションにもつながって

います。私が特に重要だと考えているのは「吸収力」です。一般職の業務では、様々な法令や制度、事務手続きに加え、担当業務によっては研究内容についてもある程度の知識・理解が求められることもあります。それらを積極的に吸収し、自分のものにする力は、どの部署においても大切だと思っています。

国際農研は組織名にもあるように、世界の様々な国や地域で活動しています。

世界の様々な国や地域に、自分や組織の仕事がどのように活かされているのか、ときには現地で直接触れることで、自分自身で体験することができるのは、大きな魅力だと思います。



**山本 菜弥** Maya Yamamoto  
企画連携部 研究支援室 連絡調整科 海外業務係  
Research Support Office,  
Research Coordination Section,  
Overseas Affairs Subsection

私は海外業務係として、出納員に任命された研究職員が外国出張期間中に執行する海外研究資金に関する業務を担当しています。日頃、外国出張から戻った出納員の皆さんから物品・役務に関する様々な証拠書類が届きま

すが、世界各地における国際農研職員の活動を、異国情緒漂う書類の確認作業を通してほぼリアルタイムで追えるところに面白さを感じます。時間が限られた中で契約内容の妥当性を日英版ともに吟味することが求められるときは緊

張しますが、その分やりがいも大きいです。また、出納員による研究資金の管理や執行状況を厳しくチェックする必要がありますが、商習慣の違いなどの様々な事情により一筋縄ではいかない場面も多々あるため、出納員や周囲との細かなやりとりを欠かさず、状況に応じて柔軟に対応する力が求められます。

国際農研の魅力は、事業の大きさと組織の小ささが両立しているところにあると感じています。取り組んでいる課題は地球規模ですが、職員数は200名に満たない小さな組織です。国際色豊かでアットホームなだけでなく、一人ひとりの貢献度が高く、組織の一員であることを実感できる職場環境が国際農研には整っています。



**石山 宏行** Hiroyuki Ishiyama  
企画連携部 企画管理室（圃場管理室）  
Research Planning and Management Office  
Hachimantai Experimental Field

研究者が行う圃場試験を支えるために、主に稲や大豆などの作物栽培に関わる準備や管理を担当しています。トラクターなどを使った畑の耕起や水田の代かき、病害虫対策のための農薬散布などを行いながら、その時々々の気候や土壌の状態に合わせて最適なタイミングで作業を進めています。効率よく、そして安全に作業を行うことを心がけています。

試験や研究に欠かせないデータや作物の変化を身近に観察でき、その成果が研究者の仕事に直接つながっていくことに、とてもやりがいを感じています。国際農研ならではの特色として、日本で見慣れた稲や麦・大豆だけでなく、海外からのさまざまな品種やユニークな色・形をした作物に触られるのも魅力の一つです。農業機械を安全かつ正確に操作する技術や、

天候・土壌・作物の生育状況を見極める観察力と判断力が求められます。さらに、農業や肥料の正しい取り扱いに関する知識や、効率よく作業を進める段取り力、チームで働くためのコミュニケーション力も欠かせません。もちろん体力や集中力も必要ですが、経験を重ねる中で自然と身につけていきますので、何よりも大切なのは「元気」と「やる気」、そして「作物への興味」だと思います。

国際農研では、世界が直面する農業の課題に研究を通じて取り組んでいます。その現場を支える一員として働くことで、グローバルな視点で農業の発展に貢献できるのが大きな魅力です。研究者と連携して実験や調査に取り組む中で、自分自身も多くの知識と技術を深めることができ、国際的な課題解決の一端を担えることに誇りを持っています。

## キャリアパス対談

# 研究職と一般職

## 異なるキャリアに共通する想い

### CAREER PATH

国際農研（JIRCAS）は、地球規模の食料・環境問題の課題に対し、国際的な視点で研究と技術開発を推進する研究機関です。研究成果を通じて国際社会に貢献する研究者と、それを支える組織運営の専門家がいます。

今回の座談会では、国際共同研究の最前線を率いる環境プログラムディレクター（PD）林さんと、組織運営の要として庶務課長を務める谷田部さんに、お二人のキャリア観、仕事にかける想い、そして若い世代へのメッセージを聞きました。



**林 慶一** Keiichi Hayashi  
プログラムディレクター（環境）  
Director, Environment Program  
専門分野：熱帯土壌学

**谷田部 潤** Jun Yatabe  
総務部 庶務課長  
Head, General Affairs Section

### 国際的な研究の現場で身についたこと

**司会** 林さん、国際農研でのキャリアパスはどんなイメージでしたか？

**林** 最初は「国際」という言葉に惹かれ、世界で通用する研究者になりたいと考えていました。実際にここで研究を進める中で感じたのは、専門知識だけでなく、異文化理解や多国籍の関係者と協働する力が欠かせないということです。現地に足を運び、課題の背景や人々の暮らしに触れることで、研究が社会にどう役立つのかを実感し、「社会に貢献する研究」の重要性を肌で学びました。

若手の頃、先輩から「使った予算以上の成果を形にせよ」とよく言われました。

研究成果を論文という形で示すことは今も変わりませんが、それ以上に、自分の研究が社会にどんな価値を生み出せるのかを常に意識するようになりました。

### マネジメントが拓く新たな視点

**司会** PDという立場では、研究者としての役割に加えてマネジメント力も求められるのではないのでしょうか？

**林** その通りです。プロジェクトリーダーやPDとしては、自分の研究成果だけでなく、チーム全体の成果をどう高めていくかが重要になります。その経験を通して初めて、「組織の中で成果を生み出す」という視点が育ちました。

外から見れば、「環境プログラム」や「〇〇プロジェクト」といった枠組みではなく、すべてが「国際農研」という一つの看板のもとに映ります。だからこそ、内部の垣根を越えて連携を促し、まとまった形で成果を外に示す努力が欠かせません。研究者個人から組織の一員へと役割が広がる——それこそがこの立場ならではの醍醐味だと感じています。

### 組織を支える意義と工夫

**司会** 続いて谷田部さん。管理部門として心がけていることはありますか？

**谷田部** 私は農研機構からの人事交流で国際農研に赴任し、労務管理や給与など



の人事労務関連の仕事を皮切りに担当範囲を少しずつ広げながら現在の課長職に就きました。

事務部門は、いわば「縁の下の力持ち」です。研究者の皆さんが本来の力を存分に発揮できるよう支えることが、自分たちの使命だと考えています。異動の多い仕事柄、職場ごとに文化ややり方が異なるため、これまでの経験を活かしつつ、その都度新しい環境に合わせて柔軟に調整しながら支えることを大切にしてきました。

課長職に就いてからは、特に報告・連絡・相談（報連相）を意識し、情報共有に努めています。一人で決めると視野が狭くなりがちなので、全体のバランスを見ながら課としてベストな判断をしています。そうした積み

重ねが組織への信頼を育み、チームとしての安定感にもつながっていると感じています。

### 「研究職」と「一般職」一車の両輪

**司会** 研究職と一般職、それぞれの役割はどう違い、どのように重なり合うのでしょうか？

**林** 私たち研究職は、学際的な研究成果を論文や技術として形にし、それを国際社会や地域へ還元していくことが基本だと思います。

**谷田部** 一般職は、そうした研究活動が円滑に進むよう、環境を整える役割を担っています。立場は違っても、同じ目的に向かって進む「車の両輪」のような関係ですね。共通しているのは、「国際農研の一員として地球規模の課題に挑む」という意識だと思います。

**林** まさにその通りです。例えるなら、研究職がエンジンで、一般職はハンドルやブレーキ。役割は異なりますが、お互いがかみ合うことで力強く前へ進むことができますのだと思います。

### この舞台だからできること

**司会** 国際農研で働く中で、どのような魅力ややりがいを感じていますか？

**林** 世界的に見ても、農業・林業・水産業を一体的に扱う研究機関は極めて珍し

いと思います。単一分野にとどまらず、学際的に研究ができることは国際農研ならではの大きな魅力です。海外の現場に直接技術を届け、その成果が人々の暮らしに役立つ瞬間に立ち会えることは、研究者として格別のやりがいです。

**谷田部** 事務職にとっても国際農研は魅力的な職場です。分野も国籍も異なる多様な人と共に働ける環境は、自分の視野を大きく広げてくれます。さらに、コミュニケーションが取りやすく風通しの良い職場なので、安心して業務に打ち込めると感じています。

### 必要なのは「チームワークと思いやり」

**司会** 国際的な環境で仕事をするうえで、どのような姿勢が大切だと感じていますか？



**林** 対象国の多くは非英語圏ですが、協働には英語でのコミュニケーションが欠かせません。重要なのは、自分の研究を押し付けるのではなく、相手国の研究者に「このプロジェクトは自分たちのものだ」と感じてもらうことです。そのためにも、相互理解を重ね、状況に応じて柔軟に対応する姿勢が必要だと思います。これこそが国際協力の基本です。

**谷田部** 日常の業務でも、実は同じことが言えます。一人で抱え込まず、周囲と連携しながら進めることが大切です。国際農研の職員は皆、「地球の食料と未来のために」という大きな目標を共有しています。その共通の想いがあるからこそ、遠慮せずに助けを求め、互いに支え合えるのだと思います。

### 失敗も、経験も、糧になる

**司会** これから国際農研に入ってくる若い皆さんへ、ぜひお二人からメッセージをお願いします。

**谷田部** まずは、どんな経験でも積むことが大切です。どんな業務であっても、自分の財産となり、困難に直面したときに必ず生きてきます。若いうちは遠慮せず周囲を頼り、教えてもらってください。そして、その経験を、将来自分が先輩になったときに今度は「恩送り」として後輩へ返してほしいと思います。



**林** 研究職にとって重要なのは、挑戦する姿勢です。国際農研には海外で活動する機会や、多様な研究者と交流できる環境があります。その恵まれた環境を活かし、成果を論文という形でしっかり残してほしい。若いうちは体力も気力も十分にありますが、積極的にチャレンジしてもらいたいですね。

### まとめ 多様な道がひとつに収束する

研究職と一般職。歩んできたキャリアは異なっても、共通しているのは「国際農研の一員として地球規模の課題に挑む」という使命です。

林さんは国際舞台で研究を進める中で、「研究を形として残すこと」、「組織として成果を生み出すこと」の重要性を学びました。谷田部さんはさまざまな業務を通じて、「支える力」や「情報を共有して前へ進める力」を磨いてきました。

二つのキャリアは異なる道ですが、目指す先は同じです。国際農研は、多様なバックグラウンドを持つ人々が集い、それぞれの立場から国際社会に貢献できる場所です。未来を担う皆さんも、ぜひこの舞台で自分のキャリアを描いてください。

**林 慶一** Keiichi Hayashi  
プログラムディレクター（環境）  
Director, Environment Program  
専門分野：熱帯土壌学

- 2002年1月 ● 国際半乾燥熱帯作物研究所 (ICRISAT : ニジェール) ポスドクフェロー
- 2003年4月 ● 国際農研 生産環境部 任期付研究員
- 2008年4月 ● 生産環境領域 主任研究員
- 2011年4月 ● 生産環境・畜産領域 副プロジェクトリーダー
- 2018年4月 ● 生産環境・畜産領域 プロジェクトリーダー
- 2021年4月 ● プログラムディレクター（環境）



**谷田部 潤** Jun Yatabe  
総務部 庶務課長  
Head, General Affairs Section

- 1987年4月 ● 農林水産事務官 行政職（一）（蚕糸試験場総務部会計課）
- 1988年10月 ● 蚕糸・昆虫農業技術研究所 総務部会計課
- 2001年10月 ● （独）農業生物資源研究所 総務部管理課用度係長
- 2016年4月 ● 農研機構 次世代作物開発研究センター 企画管理部管理課庶務チーム主査
- 2017年4月 ● 農業技術革新工学研究センター 総務部総務課総務チーム長
- 2019年4月 ● 国際農研 総務部庶務課課長補佐（労務・人事班担当）
- 2024年4月 ● 総務部庶務課長



# 採用情報とキャリアの入り口

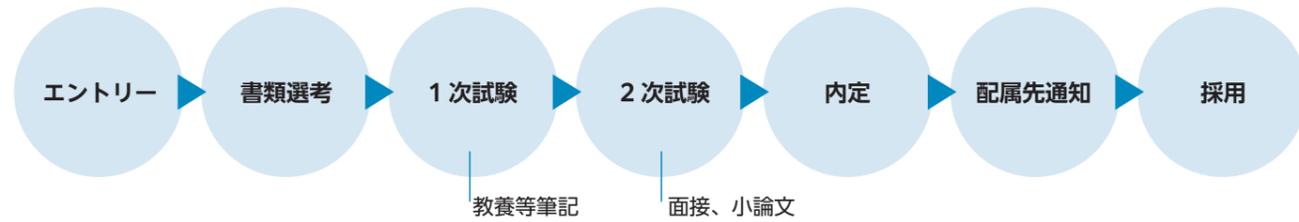
採用フロー、育成・研修、勤務地・福利厚生、採用実績、役職員数、応募者向け Q&A

## Recruitment information and career gateway

Recruitment flow, training and development, work location and benefits, recruitment record, number of employees, Q&A for applicants

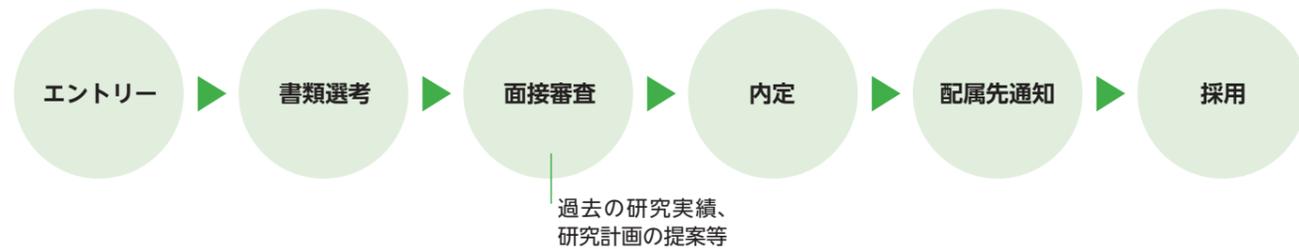
### 採用フロー

一般職員 ※公募開始から採用決定までの期間は概ね3ヵ月程度



研究職員 ※公募開始から採用決定までの期間は概ね3ヵ月程度

※若手育成型任期付職員には、採用後のプロジェクト参画、研究計画発表会、研究経過報告会等の研究力向上の場を提供するとともに、任期満了前にはテニュア審査により任期の定めのない職員としての適性を審査します。



### 育成・研修

新規採用職員研修・階層別研修・評価者研修など、国際農研として求める人材の育成や階層等に応じた多様な能力開発を目的とした研修、ダイバーシティやワークライフバランス等の働き方に関する研修、業務上必要な資格取得の支援も行っています。

### 勤務条件・福利厚生

勤務地	本所（つくば市）・熱帯・島嶼研究拠点（石垣市）のどちらかとなります。 また、農林水産省所管の独立行政法人等への人事異動（全国の機関）等の人事交流も実施しています。
標準の勤務時間	8:30～17:15
休日・休暇等	完全週休2日制（週休日：土曜日、日曜日） 休日：祝日、年末年始（12月29日～1月3日） 休暇：年次有給休暇（年20日）のほか、病気休暇、特別休暇（夏季〈年3日〉、介護休暇〈年5日〉）があり、他に結婚、出産、忌引き休暇等もあります。



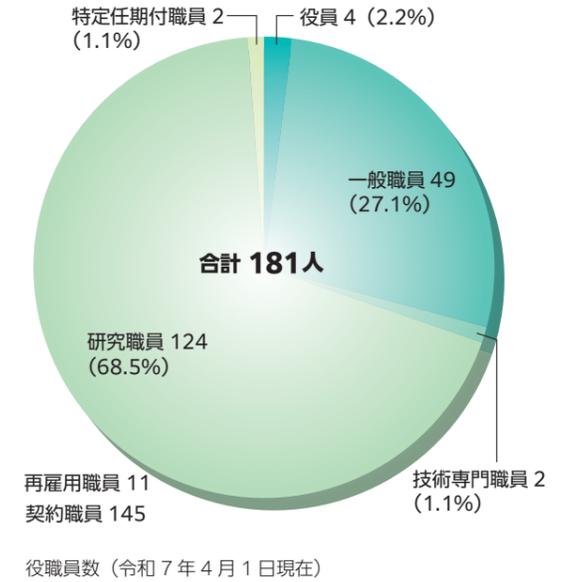
採用に関する問い合わせ先：<https://www.jircas.go.jp/ja/form/recruitment>

### 採用実績

	一般職員		一般職員 (技術支援系)		研究職員		計(年度)	
	応募	採用	応募	採用	応募	採用	応募	採用
2021年度 (うち女性)	19 (10)	1 (0)			98 (34)	10 (2)	117 (44)	11 (2)
2022年度 (うち女性)	13 (8)	2 (1)	4 (0)	1 (0)	71 (29)	5 (0)	88 (37)	8 (1)
2023年度 (うち女性)	8 (5)	1 (1)			53 (19)	4 (3)	61 (24)	5 (4)
2024年度 (うち女性)					57 (16)	5 (1)	57 (16)	5 (1)
2025年度 (うち女性)	10 (5)	3 (1)	3 (0)	1 (0)	90 (38)	5 (1)	103 (43)	9 (2)
計(職種)	50	7	7	2	369	29	426	38
うち女性	(28)	(3)	(0)	(0)	(136)	(7)	(164)	(10)

2021年度～2024年度までの応募者数と採用者数を、一般職員・研究職員で区分。

### 役職員数



### 応募者向け Q&A

Q1 海外出張の機会はどのくらいありますか？	A 研究職の場合は、海外の研究機関や現地試験地などで共同研究を行うため、年に数回程度の出張があります。期間は短期から数か月間の中長期まで、テーマによってさまざまです。一般職の場合は国内での業務となりますが、監事監査などの関係で、プロジェクトサイトへの出張や同行の機会が生じることもあります。
Q2 英語を使う場面はどのくらいありますか？	A 研究職では、海外の研究機関との共同研究や国際会議・学会への参加、英語論文の執筆や査読対応など、日常的に英語を使用する場面があります。一般職でも、海外とのメールや文書のやり取り、英語資料の確認・作成を行う機会があり、部署によって使用頻度は異なります。
Q3 配属や担当業務はどのように決まりますか？	A 採用後の配属は、本人の専門分野や経験、希望を考慮しながら、組織全体の研究計画や業務ニーズに基づいて決定します。一般職についても、本人の適性や各部門の業務内容を踏まえ、幅広い事務分野から最適な配置が行われます。
Q4 理系出身でなくても一般職として活躍できますか？	A はい、活躍できます。一般職は、人事・総務・会計・契約・広報など、研究活動を支える幅広い業務を担っており、特定の理系専門知識は必須ではありません。文系・理系を問わず、基礎的な事務能力やコミュニケーション力、組織運営への関心があれば活躍の場があります。
Q5 新卒と中途で採用プロセスの違いはありますか？	A 新卒採用と中途採用では、募集時期や選考スケジュールが異なる場合がありますが、いずれも応募書類による選考と面接を通じて、人物像や専門性を総合的に評価します。中途採用では、これまでの実務経験や専門性がより重視される点が新卒と異なる点です。
Q6 研究職・一般職ともに、異動の可能性はありますか？	A あります。研究職は国内の研究拠点（石垣）や関連機関（農林水産省、農研機構等）への異動があり、分野を広げるきっかけにもなります。一般職も、人事・会計・渉外・広報など複数の業務を経験するケースが多く、希望や実績に応じてキャリアを積み重ねていくことができます。
Q7 育児と仕事の両立はしやすい環境ですか？	A はい。裁量労働制（研究職のみ）や休暇等の育児支援制度、在宅勤務制度など、柔軟な働き方を支える仕組みが整っています。産休・育休からの復職実績も多く、男女を問わず安心して長く働くことができる環境です。上司や同僚の理解もあり、家庭と仕事を両立しながら活躍している職員が多いのが特徴です。